

モーパッサンの『ピエールとジャン』の構成

—— <繰り返し>の効果 ——

加藤 宏 幸・柴田 聡 美¹⁾

われわれは、「モーパッサンの短編小説の特質」²⁾において、テーマが異なるモーパッサンの7編の短編小説を詳細に分析し、そのすべてが3段階構成でできていることを明らかにした。「第1段階は状況の説明であり、第2段階で思いがけない事件が起こり、それが発展する。第3段階で事件の結末がつく。結末は幸福か不幸かのどちらかになるが、多くの場合、結末は不幸である」³⁾。今度はわれわれは、モーパッサンの長編小説の構成について調べることにし、まず最初に『ピエールとジャン』*Pierre et Jean*⁴⁾を取り上げることにした。

I. 『ピエールとジャン』の概要

第1章 船遊びとジャンの遺産相続⁵⁾

ロラン Roland 夫妻、その息子ピエール Pierre とジャン Jean は、近くに住む若くて美しい未亡人ロゼミリ Rosémilly 夫人と共にル・アーヴル Le Havre 港から船遊びに出掛ける。夕方一家が帰宅すると、女中のジョゼフィーヌ Joséphine から公証人の書記が3度来たことが知らされる。晩に公証人ルカニユ Lecanu 自身が訪れ、亡くなったロラン一家の知人のレオン・マレシャル Léon Maréchal の遺言を伝える。遺言で、マレシャルはジャンを彼の遺産相続人に指定していた。

この章において、作者は主要登場人物をまとめて簡潔に紹介している。

- 1) 岩手大学大学院人文社会科学部研究科（修士課程）学生。
- 2) 加藤宏幸著「モーパッサンの短編小説の特質」（岩手大学人文社会科学部総合研究委員会編『東洋と西洋の短編小説の系譜に関する研究』、55-70ページ）。
- 3) 同上書、69ページ。
- 4) MAUPASSANT (Guy de), *Pierre et Jean* (*Œuvres de Guy de Maupassant*, Paris, Club de l'Honnête Homme [© 1987], pp.3-112).
- 5) 各章の表題は筆者が付した。

彼（ロラン氏）は昔パリの宝石商であったが、船遊びと釣りがたまらなく好きだったので、金利収入でつつましく暮らせば十分ゆとりがある生活ができるようになるや否や、商売を止めてしまった。

だからル・アーヴルに引退し、小舟を買って、素人水夫になった。彼の2人の息子ピエールとジャンは、パリに留まって勉学を続けていたが、休暇をとってときどきやって来て、父親と娯楽を共にした。

高等中学校を出ると、ジャンより5歳年上のピエールは、様々な職業に次々と適性があると感じ、約六つの職業に順々に就いてみたが、すぐにどれも嫌になり、直ちに新しい希望に向かって飛び込んで行った。

最後に彼は医学に興味を持ち、猛烈に勉強したので、かなり短期間学んだだけで、大臣から修学期間免除の許可を得て最近医者資格を取得した。彼は熱狂的で、聡明で、気紛れだが頑固で、理想と哲学的思想をたくさん持っていた。

ジャンは兄が黒髪であるのに対し金髪であり、兄がすぐかっとなるのに対し沈着であり、兄が恨みっぽいのに対し優しかったが、静かに法律を学び、ピエールが医者資格の免状を取得したと同時に最近学士の免状を取得した。⁶⁾

彼らの母親（ロラン夫人）はきちょうめんな女性で、会計係の女性がよく持っている優しい心を生れつき備えた感傷的な中産階級の女性で、共同生活のすべての些細な出来事が彼女の2人の大きな息子の中に引き起こしたちょっとした争いを絶えず鎮めた。さらに、ささいな出来事が今彼女の平静を乱し、厄介なことが起こるのではないかと心配していた。なぜなら、この冬の間、彼女の子供たちの両方とも専門分野の学業を終えようとしていた時、彼女は近所に住むロゼミリ夫人という、2年前に海で死んだ遠洋航海船の船長の未亡人と知り合いになったからであった。彼女は23歳のとても若い未亡人であったが、自由な動物のように、本能的に生き方を知っていた女傑であった[.....]。⁷⁾

第2章 ジャンへの嫉妬

ジャンの遺産相続の件が告げられた後、ピエールとジャンはそれぞれの思いを胸に別々に夜の街に出て行く。ピエールはル・アーヴル港の防波堤を歩きながら、自分がなぜこんなにいらだっているのかと自問し、その原因を突き止めようとする。そして、このいらだ

6) MAUPASSANT, *op. cit.*, p.15.

7) *Ibid.*, p.16.

ちは遺産を相続した弟ジャンへの嫉妬によるものであると考える。

ピエールは、防波堤の突端に座ってもの思いに耽っている弟のジャンに気が付く。遺産を相続した弟を祝福して、彼とすぐに別れ、老薬剤師マロウスコ Marowski を訪問する。彼は、ポーランド人で、医者となったピエールを頼ってル・アーヴルに移って来て薬局を開業している。ピエールはマロウスコにジャンの遺産相続のことを話す。

『それはよい結果を生み出しませんよ』

またいらいらしてきたピエールは、マロウスコがこの言葉で何を意味しているのか知りたいと思った。——どうしてよい結果を生み出さないのだろうか。弟が一家の友人から財産を相続したことから、どんな悪い結果が生じるのだろうか。

しかし、注意深い爺さんは、それ以上説明しなかった。

『このような場合には、2人の兄弟に等分に遺すものですよ。あなたに言うておきますけど、それはよい結果を生み出しませんよ』⁸⁾

第3章 母親に対する疑惑の芽生え

医者としての仕事を始める決意をしたピエールは、アパートマンを探しに出掛け、適当なものを見つける。その後で、顔なじみの酒場の女給仕の店を訪れる。彼は彼女にジャンの遺産相続のことを話す。

『弟はとても運がよかった。2万フランの遺産を相続したんだ』

彼女は青い貧欲な目を大きく見開いた。

『まあ！誰がそれを遺してくれたの、お祖母さん、それとも伯母さん』

『いや、両親の昔の友達だ』

『ただのお友達ですか。まさか！あなたには何も遺してくれなかったの』

『そう。私はあまりその人を知らなかったから』

彼女はしばらく考えていたが、変な微笑を唇に浮かべて言った。

『ほんとうに、そんな友達を持って弟さんは幸せですね。あなたに似てなくとも不思議じゃないわ』⁹⁾

女給仕の言葉を聞き、そして前の晩のマロウスコの言葉を思い出し、ピエールはジャンはマレシャルの子ではないだろうかという疑惑を強く抱くようになった。母親の名誉を傷

8) *Ibid.*, p.35.

9) *Ibid.*, pp.40-41.

つけないようにするためには、受け取った財産を弟に放棄させなければならない。

第4章 母親に対する疑惑の深化

翌日ピエールは、酒場の女給仕が言ったことをいろいろ考えてみて、前日母親に対して抱いた疑惑を否定し、船遊びに出掛ける。

その日の一家の夕食の時に、突然ピエールはマレシャルと知り合いになった経緯について訊ねる。ピエールは父親の説明に納得できない。

穴を開け引き裂く弾丸のように、この考えが突然猛烈にピエールの心の中に入って来た——『あの人が私を最初に知ったのなら、あんなに献身的であったのなら、あんなに私が好きで抱いてくれたのなら、私が私の両親とあの人の結び付きの原因であるのなら、なぜあの人は全財産を私の弟に遺し、私には何も遺さなかったのだろう』¹⁰⁾

夕食後ピエールは家を出て、また薬剤師マロウスコを訪ねた。

彼は今はもう疑ってはいなかった。老人は次のように考えていた——『あなたはその遺産を弟さんに相続させるべきではなかった。あなたのお母さんが人に悪く言われることになる』。おそらく彼は、ジャンはマレシャルの子供だと信じているのだ。もちろん彼はそう信じているのだ！¹¹⁾

ピエールはル・アーヴル港の防波堤に行き、なぜマレシャルがその全財産をジャンだけに遺したのか、その真相を解明しようとする。彼は母親とマレシャルの関係を次のように考えた。

彼女は彼を愛していたのだ。そうでないとどうして言えるだろうか。彼女は自分の母親である。母親に関することだからと言って、明白な証拠まで否認するほど盲目に愚かになれるだろうか。

彼女は身を任せたのだろうか。……もちろんだ、それだから、あの男は他に恋人を持たなかったのだ。——もちろんだ、それだから、彼女が遠くに離れ年を取っても、彼女を愛し続けたのだ。——もちろんだ、だからこそ、自分の財産の全部を彼の息子、彼らの息子に遺したのだ！……¹²⁾

10) *Ibid.*, p.51.

11) *Ibid.*, p.52.

12) *Ibid.*, p.57.

第5章 マレシャルの肖像画

その日の夜、ピエールはジャンの部屋に忍びこみ、ジャンの寝顔を凝視する。ジャンはロランに似ていない。消え失せたマレシャルの肖像画を見れば、はっきりするであろう。昨日から彼を悩ませている人について知りたいという抑え難い欲望に負けて、彼は母親に突然訊ねる——「マレシャルさんの肖像画はどうなったのですか」。母親は「ライティングテーブルの中にあるかもしれないので、探してみます」と言う。

友人であり愛人である人の肖像画は、妻であり母である人が、誰よりも先に、この肖像画が自分の息子に似ているということに気が付く日までは、客間のよく見えるところにあった。おそらくずっと前から、彼女はこの類似を探っていた。そして、類似を発見し、類似が現れてきているのを見て、誰もがそのうちに気付くであろうと思って彼女はある晩恐ろしいこの小さな肖像画を取りのけて、引き裂く勇気がなかったので隠したのだ。¹³⁾

ピエールはトルーヴィル Trouville に船で遊びに出掛けたが、肖像画のことが気になったので、早めに家に戻る。夕食の時彼が、「あの肖像画は見つかりましたか」と母親に訊ねると、母親は驚いて目を見張り、「まだ見つからない」と答える。ロラン氏が「書類を整理していた時、お母さんがそれを出したよ」と言うと、ロラン夫人が「あとで持って来ましょう」と言う。ピエールは嘘をついた母親をじっと見詰める。

母親が持って来たマレシャルの肖像画を見たピエールは、ジャンによく似ていると思った。母親は彼が疑いを抱いていることは分かっていた。彼は苦しんでいたが、苦しむ母親を見て満足を覚えた。

第6章 サン・ジュアンへの遠足

1, 2週間、ロラン一家の生活は平穏に過ぎる。

ある晩、ロランは陰気なピエールに気付いて、「誰かの死を悲しんでいるかのようだ」と言うと、ピエールは、「あなたが知らなかった、私が大変好きだった女性の死を悲しんでいるのです」と答える。このような会話を聞いていたロラン夫人は、真っ青になって喘ぎ始め、両手で顔を覆い泣き出す。夫のロランは動転する。

しかし、ピエールもまた彼女と同じくらい苦しんでいる。もはや母親を愛することも尊

13) *Ibid.*, p.63.

敬することもできなくなり、ただ母親を苦しめることしかできないことに激しく苦しんでいる。

ジャンの引っ越しの日に、それを祝ってサン・ジュアン Saint-Jouin への遠足が計画された。ロラン一家にロゼミリ夫人と船長ボジール Beausire が加わり、一行6人が目的地に向かう。そこに着き、昼食後皆で海岸で海老取りをする。海老取りの最中に、ジャンは予てから愛情を抱いていたロゼミリ夫人に愛の告白をする。それを期待していた彼女は、すぐに結婚を承諾する。

彼らは黙ってしまった。不安でありながら、彼女がほとんど不安な表情を見せず、非常に理性的であるのに、彼は驚いていた。彼は、愛の優しい言葉が交わされたり、承諾を意味する拒絶があったり、海水のざあざあと打ち寄せる中で、海老取りをしながら非常に色っぽい愛の芝居が演じられるのではないかと期待していた。しかし、それはたちまち終わってしまった。彼は、ちょっと言葉を交わしただけで、親密になり、結婚してしまったように思った。¹⁴⁾

第7章 真実の告白

遠足からル・アーヴルに戻った一行は、ジャンの新しい家に立ち寄る。ロラン氏とロゼミリ夫人が帰り、ロラン夫人とピエールとジャンが残る。

ピエールがロゼミリ夫人を<未亡人>呼ばわりしたのでジャンは怒る。これが契機となって、二人の間で激しい口論が始まる。ジャンはピエールに言う——「あの財産が私のものになった時、あなたは激怒し、私を憎悪し、それをあらゆる仕方で表したでしょう」、「私が金持ちになってしまった今、あなたはもうこらえられなくなり、意地悪になり、あたかもそれが母の責任であるかのように、母を苦しめている！」。弟にこのように言われて、ピエールの怒りは頂点に達する。

『無理にでもあなたが私を尊敬するようにしてあげます』

『おまえを尊敬する……貧欲のためにわれわれ皆の名誉を傷つけたおまえを！』

『何ですって。もう一度言ってください……もう一度！』

『他の男の息子と思われる時には、人の財産なんか受け取っちゃいけないと言ってるんだ』

ジャンは訳が分からないまま、その真意が見抜けた当て擦りに度を失ってじっとして

14) *Ibid.*, p.78.

いた。

『何ですって。もう一度言ってください』

『皆がささやいていることは、皆が言いふらしていることは、おまえはおまえに財産を遺してくれた男の息子だということだ。いいか！ちゃんとした男なら、母の名誉を傷つける金なんか受け取ったりしないものだ』¹⁵⁾

ピエールが出て行く。ジャンは最初ピエールの言ったことを信じまいとするが、その言葉が発したピエールの苦悩に満ちた態度からみて、それが真実であると確信するに至る。

隣室にいる母親のことが気になったジャンは、部屋に飛び込む。泣き出した母親にジャンが、「私はそれが本当でないことをよく知っています」と言うと、彼女は、「いいえ、それは本当だよ」と言う。ロラン夫人は真実を告白する。

『われわれがまだいっしょに生活し、互いに抱擁し合うことができるには、いいかいジャン、私はおまえの父親の愛人であったけれども、それ以上にあの方の妻、あのかたの真の妻だったこと、私はそのことを心底では恥じていないということ、何も後悔していないということ、死んでしまったけれどもまだあの方を愛していること、永久にあの方を愛し続けるということ、あの方しか愛さなかったということ、あの方は私の命であり、希望であり、慰めでありあんなにも長い間私にとってすべてであったということを信じるんだよ』¹⁶⁾

『今はあの方は亡くなられた！……しかし、あの方はおまえのことを忘れずにいたのだから、まだわれわれを愛していたんだ。私は最後の息を引き取るまであの方を愛します。私は絶対に彼と縁を切ったりしません。そして私は、おまえがあの方の子であるからおまえを愛します』¹⁷⁾

ジャンは、やっと立ち上がることができた母親を家まで送る。

第8章 船医となる決心

家に帰り落ち着きを取り戻したジャンは、家庭内に平和を取り戻さなければならないと考える。ピエールと毎日顔を合わせることはできないし、また母親がピエールと同じ家に

15) *Ibid.*, p.85.

16) *Ibid.*, p.90.

17) *Ibid.*, p.91.

住むこともできない。ジャンはマレシャルの遺産を受け取るべきかどうか迷う。

『そうだ』と彼は思った。『私はピエールの父親の息子ではないのだから、私の家の遺産を断念し、それを全部ピエールに遺さなければならない。それが正しい。そうであれば、私が私の父親の金を取っておくのも正しいことではないだろうか』¹⁸⁾

ジャンはピエールを家から遠ざけるために、ピエールにロレーヌ Lorraine 号の船医になることを勧める。どうしても家を去りたいと思っていたピエールは、船医になることを希望し、そのために奔走する。

ロラン夫人は、ジャンといっしょにロゼミリ夫人の家に行き、息子との結婚を承諾してくれたことに対して彼女にお礼を言う。ロラン夫人は息子にマレシャルの写真を渡す。

第9章 船医としての出発

船医任命の知らせがピエールに届く。ピカルディ Picardie 号の船医に会い、船医の仕事について聞き、街に戻る。その時突然新たな悲しみに襲われる。

それはもはや人をひどく苦しめる精神的苦痛ではなく、避難所のない動物の狂乱であり、またそれは、もはや屋根をもたない、雨、風、雷雨、宇宙のすべての容赦ない力が襲おうとしているさ迷う人間の肉体的苦痛であった。¹⁹⁾

ピエールは、流浪する徒刑囚のような苦しい生活を送ることを余儀なくされたのは、母親が男に身を任せたからであると信じる。彼は、自分の気持ちをもっとよく分かってくれるであろう薬剤師マロウスコを訪問する。彼に「大西洋航路の定期船の船医として出発する」と告げると、彼は怒り出し、「あなたについてここに来たかわいそうな老人を見捨てるのですか」とわめく。

次にピエールは、自分に母親を疑う気持ちを起こさせた酒場の女給仕を訪問する。彼女はやっと彼に気付く。「アメリカに行くんだ」と言うと、「素晴らしい国だそうですね」と答える。二人の会話はそれだけである。

ピエールの出発の日が来る。ロラン夫妻、ジャン、ロゼミリ夫人、船長ボジュールが見送りに来る。彼らはロランの小舟ベルル Perle 号に乗り込み、防波堤の外まで出て、ピエールが乗ったロレーヌ号が来るのを待つ。ロラン夫人の目に涙があふれる。

18) *Ibid.*, p.94.

19) *Ibid.*, p.103.

山のように高い、列車のように速い定期船は、今ベルル号にほとんど触れんばかりになりながら通り過ぎて行った。

ロラン夫人は取り乱し、気も狂わんばかりになり、両腕を船の方へ差し出した。そして彼女は、自分の息子、制帽をかぶった息子のピエールが、両手で別れのキスを投じているのを見た。²⁰⁾

Ⅱ. 『ピエールとジャン』の構成

9章で構成されている『ピエールとジャン』は、その内容からみると、次の三つの部分に分けられるであろう。(1)第1部(第1章)、(2)第2部(第2章—第5章)、(3)第3部(第6章—第9章)。3部を順次内容の面から分析し、小説の構造を明らかにしたい。

第1部(第1章)——小説の主要人物であるロラン氏、ロラン夫人、彼らの息子の兄ピエールと弟ジャンが簡潔に紹介される。8月初めのある日、ロラン一家とロゼミリ夫人は船遊びに出掛ける(船遊び①——第1章)。レオン・マレシャルの遺言によって、ジャンが彼の莫大な遺産の相続人に指定される。この事実が第1部でもっとも重要であり、これが基盤となって物語が展開される。これが物語展開の第1要素である。

ここには主要人物が列挙されているが、主役的人物も準主役的人物も現れていない。

第2部(第2章—第5章)——主役はピエールである。ジャンの遺産相続の件が告げられた夜、ピエールはル・アーヴル港の防波堤を歩きながら、自分のいらだちの原因を探り、それが遺産を相続した弟ジャンへの嫉妬に因るものであると判断する(防波堤での思索①——第2章)。物事の真実を探求したり、重要な決断をする前に、ピエールは防波堤に来て海と向かい合う。

その後で、ピエールは薬剤師マロウスコを訪問する(マロウスコ訪問①——第2章)。ピエールが彼にジャンの遺産相続の件について話すと、彼は「それはよい結果を生み出しませんよ」と言う。マロウスコ訪問は物語の不吉な展開を予想させる。これが物語展開の第2要素である。

翌日ピエールは、医院を開業できる適当なアパートマンを見つけた後で、顔なじみの酒場の女給仕の店を訪れる(酒場の女給仕訪問①——第3章)。彼が彼女にジャンの遺産相

20) *Ibid.*, p.111.

続の件について話すと、彼女は「弟さんがあなたに似てなくとも全く不思議じゃないわ」と言う。酒場の女給仕訪問もまた物語の不吉な展開を予想させる。これが物語展開の第3要素である。

翌日ピエールは、昼食後船遊びに出掛ける（船遊び②——第4章）。夕食の時に彼は、マレシャルと知り合いになった経緯について訊ねる。夕食後、薬剤師マロウスコを訪問する（マロウスコ訪問②——第4章）。マロウスコの言葉から、ピエールは、彼はジャンがマレシャルの子であると信じていることを知る。このマロウスコ訪問以後、ピエールは、なぜマレシャルがジャンだけに遺産を遺したのか、その真相の解明に突き進む。このマロウスコ訪問は物語展開の第4要素である。

薬剤師の店を出てル・アーヴル港の防波堤に行き、思索に耽る（防波堤での思索②——第4章）。マレシャルがジャンだけに全財産を遺したのは、ジャンがマレシャルの息子であるからであると考える。

その日の夜、ピエールはジャンの部屋に忍び込み、ジャンの寝顔を凝視し、ジャンがロランに似ていないことを確認する。翌朝、ピエールは、最近見掛けなくなったマレシャルの肖像画の所在を母親に訊ねる。気を紛らすために、彼はトルーヴィルへ船遊びに出掛ける（船遊び③——第5章）。夕食の時、母親が持って来たマレシャルの肖像画を見て、ピエールはそれがジャンによく似ていると思う。

第2部の主役はあくまでもピエールであるが、物語の展開に大きく寄与する2人の人物がいる。それは薬剤師マロウスコと酒場の女給仕である。彼らは、ジャンがマレシャルの子であることをそれとなくほめかし、ピエールを真相の解明へと押しやる。第2部に、マロウスコは2度、酒場の女給仕は1度登場する。彼らの登場によって、物語の進行が速まるとともに物語が劇的になる。

船遊びの描写は、第1部に1回、第2部に2回現れる。登場人物のそれぞれにとって、船遊びは精神に安らぎをもたらしてくれる楽しい一時である。しかし、船遊びの直後に衝撃的な出来事が起こる。〈船遊び①〉の直後に、ジャンの遺産相続の話が伝えられる。そして〈船遊び②〉の直後には、一家の夕食の時にマレシャルのことが話題になる。さらに〈船遊び③〉の直後には、やはり一家の夕食の時に、マレシャルの肖像画がロラン夫人によってもたらされる。〈楽しい船遊び——不快な出来事〉が、ここまでに3回繰り返される。

作者モーパッサンは、1854年（4歳）から1859年（9歳）までノルマンディー Normandie 地方の港町ル・アーヴルの近郊に住んでいた。その後一時パリに住んだが再びノルマンディー地方に戻り、1860年（10歳）末から1863年（13歳）まで今度はエトルタ Etretat に住んだ。その後イブト Yvetot, ルーアン Rouan, パリで勉学に従事し、1872年海軍省

に就職し、その後パリで作家活動に入った。彼はエトルタを離れて以後もたびたびエトルタに戻り、海水浴や船遊びを楽しんだ。1883年にはエトルタ近郊に別荘ラ・ギエット La Guillette を建てた。

幼少の時から海と親しんできたモーパッサンにとっては、海や河での水浴、船遊び、釣りはもっとも大きな喜びであり、一生涯それらを楽しんだ。そしてそれらは、彼の多くの長編小説や短編小説に描かれた。

さらに第2部で注目すべきことがある。それは、ここに2回現れる防波堤での思索の描写である。〈防波堤での思索①〉で、ピエールは、自分のいらだちが遺産を相続した弟ジャンへの嫉妬に起因することに気付く。〈防波堤での思索②〉で、ピエールは、マレシャルと自分の家族との付き合いを過去に遡って思い起こし、自分の母親がマレシャルを愛していたこと、弟ジャンがマレシャルの子であることを確信するに至る。

波が打ち寄せる防波堤は思索の場であり、ある問題について結論を導く場である。

第3部（第6章―第9章）——1, 2週間ロラン一家の生活は何事もなくすぎる。第3部の主人公もピエールであることに変わりはないが、準主人公が現れる。準主人公は第6章ではジャン、第7章ではジャンとロラン夫人、第8章ではジャンである。

母親がマレシャルの愛人であると確信したピエールは、間接的ながらも何かにつけて母親を攻撃する。ある晩、ピエールとロランが対話していた時、ピエールが発する言葉に深く傷ついたロラン夫人は、突然泣き出す。ここに至って、ピエールとロラン夫人の関係は対立的となる。

数日後、ロラン一家はロゼミリ夫人と船長ボジュールを伴ってサン・ジュアンへ遠足に出掛ける。ジャンはロゼミリ夫人に恋を告白し、彼女から結婚の承諾を得る。ロゼミリ夫人がジャンとの結婚を承諾したことによって、ピエールと彼女、そしてピエールとジャンとの関係にひびが入る。

遠足からル・アーヴルに戻った一行は、ジャンの新居に立ち寄る。そこで、ピエールとジャンの口論が始まる。二人とも相手を深く傷つける言葉を発する。ここに至って、ピエールとジャンとの関係は完全に対立的となる。ピエールが去った後、ロラン夫人は真実を告白し、自分がマレシャルの愛人であったことを認める。これが物語進展の第5要素である。

第7章はこの小説のクライマックスであり、準主役であるジャンとロラン夫人が主役ピエールと同じ程度に活動する。

ジャンはピエールを家から遠ざけようと考え、ピエールに大西洋航路の定期船の船医に

なるよう勤める。ピエールは船医に任命される。第8章は、準主役ジャンを中心として物語が進展する。ジャンが主役と同等の活動をするのは、この章においてだけである。

ル・アーヴルを間もなく去らねばならないと思った時、ピエールは堪え難い悲しみに襲われる。この悲しみを分かってくれるのはマロウスコだけであると思い、ピエールは彼を訪問する（マロウスコ訪問③——第9章）。ピエールが定期船の船医として出発することを告げると、マロウスコは、私を見捨てるのですかと怒り出す。マロウスコにはピエールの気持ちが理解できない。ここで、二人は対立関係に陥る。

マロウスコと別れたピエールは、慰めを得られるかもしれないと思い、酒場の女給仕を訪問する（酒場の女給仕訪問②——第9章）。彼女は、ほとんど彼に無関心である。ここで、二人の関係が断絶する。

ピエールは彼女と別れ、防波堤へ行く（防波堤での思索③——第9章）。そこで、何もかも忘れて眠ろうとする。

ピエールの出発の日、ロラン氏、ロラン夫人、ジャン、ロゼミリ夫人、船長ボジュールは小舟に乗り、防波堤の外まで出て、定期船の船医となったピエールを見送る。物語の冒頭で船遊びに出掛けた人たちが、物語の終わりでピエールを見送ったのである。このようにして物語の最初と終わりが関連し、全体の統一が完成する。

第3部において、ピエールは、まず母親のロラン夫人と対立関係に陥り、ついでジャンと対立関係に陥る。さらにマロウスコ、そして酒場の女給仕との関係も断絶し、船医として独り寂しくル・アーヴルを去る。

以上述べたことを簡潔に要約すれば、次の通りである。

第1部

第1章<船遊びとジャンの遺産相続>。8月初めの1日。船遊び①。主要人物の紹介。

第2部

第2章<ジャンへの嫉妬>。同じ日の晩。防波堤での思索①。マロウスコ訪問①

第3章<母親に対する疑惑の芽生え>。第2日。酒場の女給仕訪問①

第4章<母親に対する疑惑の深化>。第3日。船遊び②。マロウスコ訪問②。防波堤での思索②。

第5章<マレシャルの肖像画>。第4日。船遊び③。

(1, 2週間経過)

第3部

第6章<サン・ジュアンへの遠足>。ある晩、ロラン夫人のすすり泣き。数日後のある日、サン・ジュアンへの遠足。

第7章<真実の告白>。遠足の日の晩。ピエールとジャンの口論。ロラン夫人、真実を告白。

第8章<船医となる決心>。次の日。ピエール、船医となる決心をする。

第9章<船医としての出発>。数日後、ピエールは船医に任命される。マロウスコ訪問③。酒場の女給仕訪問②。防波堤での思索③。10月7日、ロレーヌ号出帆。

われわれは、9章で構成されている『ピエールとジャン』を3部に分けてみた。第1部では、ジャンへの遺産相続が告げられ、第2部では、主人公ピエールが母親に対する疑惑を解明し、第3部では、ピエールは次々と人間関係を絶ち、独りル・アーヴルを去る。物語の最初のロラン一家の団結は物語の進行と共に次第に解体して行き、ついにピエールは追われるようにして家族のもとを去って行く。

この物語の展開する期間は、8月初めから10月7日までの約2カ月である。2カ月の1日1日の出来事が描かれているのではなく、その間の9日の出来事が描かれているにすぎない。それ故、物語の進行は速い。

物語の進行を速めるのは、いわゆる<繰り返し>である。<防波堤での思索>は3回、<マロウスコ訪問>も3回、<酒場の女給仕訪問>は2回繰り返されている。前に述べたように、それぞれが物語の展開において重要な役割を果たしており、物語を急速に前進させる。<船遊び>も3回繰り返されているが、これらは物語の進行を一時的に遅らせる役割を果たしている。しかしながら、<船遊び>の直後には必ず大問題が生じる。

『ピエールとジャン』において注目すべきことは、これらの<繰り返し>である。<繰り返し>は物語にリズムを与えると共に、主人公を悲劇的運命に押しやる働きも持っている。<繰り返し>はモーパッサンの長編小説の技法の一つのように思えるが、今後彼の他の長編小説について調べてみたい。